

平安時代物語文学の古筆切新出資料

池 田 和 臣

はじめに

文学研究は本文がなければ始まらない。古典文学作品の本文は、写本によって伝えられた。長い年月の間、書写が繰り返されるうちに、あるいは誤写によって、あるいは意図的に本文はもとの姿から変形していく。成立時の原本が伝存していれば、それに勝る本文はない。しかし、成立の古い平安時代の文学作品においては、原本の伝存など夢のまた夢。原本はとにかくとしても、転写本の完本でさえ、平安時代の書写にかかるものはほとんど存在していない。最も多くの写本が伝存する古今和歌集ですら、平安時代書写の完本は国宝元永本（東京国立博物館蔵）と伝藤原公任筆古今和歌集（九州国立博物館蔵）のみである。それにもかかわらず、より古い本文をもとめる断ちがたい業のようなものが、古典研究者の胸中には巣くっている。このような状況の中で、古筆切が古典文学の本文資料としてかけがえのない存在意義をもってくる。

狭義には、鎌倉時代初期以前に書写された古写本の断簡を古筆切という。今では、室町時代あたりまでの書写本断

簡も、古筆切と呼ぶのが一般的になった。古筆切の資料的価値は一つではない。たとえば、平安時代の書写にかかる古筆切は、書写の古さからしてまずもって本文資料として高い価値がある。また、文字史・仮名表記史という国語学的価値もある。さらに、筆跡も優美で個性的なものが多く書道芸術としての価値もある。様々な装飾料紙に書かれたものも少なくなく、美術史的価値ももっている。無論のこと、国文学がもとめるものは、本文資料としての側面である。

本文価値ということにしばらくなら、一般的にいつて、書写年代がくんだり原典から時間的に遠ざかるにしたがつて、古筆切の本文価値はさがる。それゆえ、書写年代がくだる古筆切であつても、比較的書写年代が古いこと、異本の本文を伝えていること、散逸作品の断簡であること、作者自筆の断簡であることなどが、もとめられる。しかし、書写年代が古いこと、異本であること、散佚作品であること、作者自筆であること、これらの要素がなくとも、資料によつては別の文学史的意味を有していることもある。断簡一葉一葉では意味のみいだせないものであつても、ツレを集積することで意味をもつてくることもある。古筆切研究には粘り強い情報集積が欠かせない。

古筆切の中にあつても、物語作品の断簡となると、それが占める比率は歌書の断簡に比べ格段に低い。わずか四パーセントという試算もある⁽¹⁾。その残存率の格段に低い物語の古筆切の中でも、源氏物語、伊勢物語が圧倒的に多く、狭衣物語がそれに続く。他の作品は極めて少ない。物語の古筆切は、伝存していること自体が稀少な資料価値をもっているといつても過言では無い。ここに、新たにみいだされた平安時代物語文学関係の古筆切資料をいささか紹介し、考察をくわえる。

一 伝後光厳院筆 竹取物語断簡

「物語のいできはじめの祖」とされる、物語文学史にとつて重要な位置をしめる竹取物語であるが、古写本に恵まれていない。古めかしい非現実的な物語とみなされ、次第に読まれず、書写されなくなったのであろう。最も古い伝存

写本は元亀元年（一五七〇）奥書の紹巴本であり、それに次ぐのが天正二〇年（一五九二）書写の武藤本（天理大学付属天理図書館蔵）であり、その他の本はすべて近世初期以降の書写本・刊本である。

伝本は通行本系統と古本系統本に大別されている⁽²⁾。古本系の写本は稀少で文化一二年（一八一五）奥書の新井本があるくらいである。しかし、古本系にも本文の乱れがあり、改訂・改竄のあとがある⁽³⁾。両系統ともに誤りの少ない改訂本文なのである。

そんな劣悪な本文状況の中、古本系とも通行本系とも異なり⁽⁴⁾、書写年代が室町時代初期くらいまで遡ると考えられる古筆切が注目されてきた。伝後光厳院筆（二条為定とする極めもある）の古写本の断簡である。田中登「物語古筆切覚書」⁽⁵⁾には、一〇葉が集成されている。「五人の求婚者紹介」の段の一葉（九行）、「蓬萊の玉の枝」の段の一葉（三行）、「火鼠の皮衣」の段の一葉（九行）、「龍の首の玉」の段の二葉（九行・九行）、「燕の子安貝」の段の一葉（八行）、「帝の求婚」の段の四葉（九行・九行・八行）である。

新たに、冒頭近くの「かくや姫の生い立ち」の段の一葉（個人蔵）が出現したので、紹介し本文について考察をくわえる。料紙は、縦九・七センチ、横九・六センチ。料紙の年代測定のため左端を一ミリ切断したゆえ、元は横九・七センチである。極札は後光厳院。

- ① なるひとになりぬれはかみあ
- ② けなとさけすかしてかみあ
- ③ けさせて（も簞書）きす丁のうちよりも
- ④ いたさすいつきやしなふこの
- ⑤ ちこのかたちのきよらなること
- ⑥ 世になくやの中はくらきところ
- ⑦ なくひかりみちたりおきな

- ⑧ の心地あしくくるしきとき
 ⑨ もこのこをみれはくるしき

『竹取物語本文集成』⑥によって、本文異同について述べる。②行目「さけすかして(下げ梳かして)」は断簡の独自異文で、注意される。断簡もこの箇所、筆に迷いがみられ、「け」(字母は「気」)の所、重ね書きしているが、下の字が判然としない。それは兎に角として、紹巴本・武藤本・新井本など、ほとんどの本は「さうして」で意味不明。蓬左文庫本と久曾神昇氏蔵乙本のみ「さうそくして(装束して)」。この箇所、難解な部分で、日本古典文学全集本⑦は「底本「さうして」とあり、「相して(うらない定めて)」とする説、「さだして(定して)」の誤写として、「議し定めること」とする説などがあるが、「とかくして(あれこれと手配して)」を「左右して」と書き、それを「さうして」と写してしまったのであろう。「とかくして」を「左右して」と書く例は、『伊勢物語』真名本など例が多い。」として、「とかくして」と校訂している。断簡の「さけすかして(下げ梳かして)」は独自異文であるが、まず「髪上げなど」といい、すぐに具体的に「下げ梳かして髪上げさせて」といい直した表現であり、意味明瞭である。

③行目「させて」は断簡の独自異文で、諸本は「させ」で「て」が無い。新井本も独自異文で「さす」。蓬左文庫本も独自異文で「をさせ」。

同じく③行目「もきす(裳着す)」は、多くの諸本同文であるが、新井本・国立歴史民俗博物館蔵本(高松宮家伝来禁裏本)が「もきせ(裳着せ)」、久曾神昇氏蔵甲本が「もき(裳着)」、名古屋大学付属図書館小林文庫蔵正保三年刊

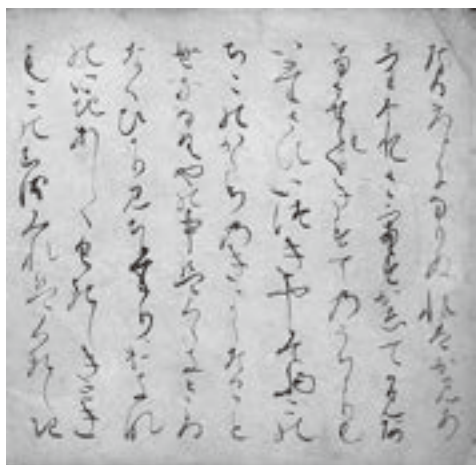


図1 伝後光厳院筆竹取物語切

本には無い。

④行目「いつきやしなふ」は諸本同様であるが、群書類従本と名古屋大学付属図書館小林文庫蔵正保三年刊本のみに「いつきかしつきやしなふ」に作る。

⑤行目「かたちの」は諸本とおおむね同文であるが、國學院大学図書館蔵本・久曾神昇氏蔵甲本・財団法人前田育徳会尊経閣文庫蔵本・内閣文庫蔵本は「かたち」で「の」が無い。

⑤行目「きよらなる」は断簡の独自異文で、諸本のほとんどが「けそうなる」「けさうなる」で意味不明である。新井本と武藤本のみ「けうらなる」(武藤本は「けそう」の「そう」を見せ消ちにして「うら」と傍書)。「けうら」は「きよら」の中世的表記であり、もとは「きよらなる」であったとおぼしい。

⑥行目「やの中は」は諸本同文であるが、久曾神昇氏蔵乙本のみ「屋内は」と「の」が無い。「屋内」で「やのうち」と読ませたのである。また、久曾神昇氏蔵甲本のみ「屋のうちも」とする。

⑥から⑦行目「ところなく」は諸本同文であるが、蓬左文庫本のみ「ところもなく」。

⑦行目「ひかりみちたり」は諸本同文であるが、紹巴本のみ「ひかりみちたる」。

⑦から⑧行目の「おきな」は諸本「おきな」で「の」が無い。断簡と同様に「の」があるのは新井本のみ。断簡は古本系と同じ。

⑧行目「心地」は諸本同文であるが、久曾神昇氏蔵甲本・蓬左文庫本・群書類従本が「こころ」「心」である。同じく⑧行目「あしくくるしきときも」は諸本同文であるが、群書類従本のみ「あしく候へし時」と独自。

⑨行目「このこをみれば」は諸本同文であるが、紹巴本のみ無い。紹巴本の脱落か。

同じく⑨行目「くるしき」は諸本同文であるが、久曾神昇氏蔵甲本と紹巴本のみ無い。

こうしてみると、断簡の本文は、古本系とも通行本系ともいえず、独自異文が少なくない。

二 今川了俊筆 源氏物語伊予切

今川了俊（一三二六〜一四二〇頃）は、鎌倉末期から室町時代にかけての人。俗名は貞世、出家して了俊と号す。武人にして歌人であった。遠江、駿河などの守護、室町幕府の九州探題を勤めた。和歌は冷泉為秀に学び、連歌は二条良基に学んだ。正徹や吉田兼好の弟子命松丸と親交があつた。注釈書『源氏六帖抄』、歌学書『了俊弁要抄』『言塵集』などを残す。『了俊弁要抄』には「愚老の歌心の付きたる事は源氏を三反披見して後より風情も心も出来し也」とあり、詠歌のために源氏物語を再三読んだらしい。

今川了俊筆の源氏物語伊予切は、夕顔巻の奥書に「筆者點者了俊 今年八十五歳也 手跡はかりはをさなく侍哉」とあり、了俊八五歳の自筆と認められている。空蟬巻が完全な形で残されており（専修大学図書館蔵）、桐壺巻・夕顔巻の断簡が古筆切として伝存している。もと大形の四半本、空蟬巻は卷子本に改装されている。本文系統は青表紙本で、冷泉家本（冷泉為秀の息子為邦筆）が親本との説がある⁽⁸⁾。藤原定家の子孫である冷泉家に伝わる写本の写しであるから、その本文が定家校訂青表紙本系統であるのは当然といえる。

了俊筆伊予切は新見哲彦による集成がある⁽⁹⁾が、そこにはみえぬ新出断簡を紹介する（架蔵）。夕顔巻の三行で、伊予切の特徴である朱による句読点が付されている。傍注や頭注は無い。料紙は楮紙、縦二六・七センチ、横六・二センチ。朱の三つの点で示された濁点は、通行の濁点表記で翻刻した。『源氏物語大成』の底本である青表紙本系大島本とまったく異同は無い。

などてか、ふかく、かくし、きこえ給事は、

侍らん、いつの、程にてかは、何ならぬ、御名

のりを、きこえ給はん、はじめより、あやしう、

三 筆者不詳 源氏物語絵巻詞書（鎌倉時代書写歟）

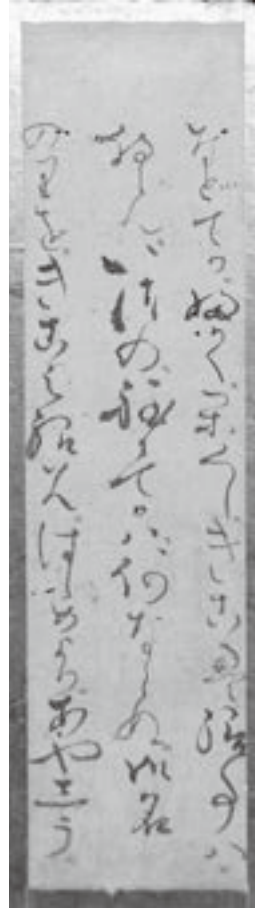


図2 今川了俊筆
源氏物語伊予切

源氏物語絵巻の詞書の遺品として名高いものに、二種類の残簡が知られている。一つはいうまでも無く、平安末期の書写にかかる現存最古の源氏物語の本文資料、国宝隆能源氏物語絵巻の詞書である。もう一つは、鎌倉後期書写にかかる絵巻の詞書で、若紫巻の絵四段と詞書三段および末摘花巻の絵一段と詞書一段が一卷となっているもの（天理図書館蔵）、そのツレである落標巻の絵一段と詞書一段が一卷となっているもの（アメリカ・メトロポリタン美術館蔵）である。前者も後者も、絵の伝存しない他の巻の詞書数行の断簡が、古筆切としていささか残されている。その他にも、伝亀山天皇筆切・伝平田墨梅筆切の存在が報告されている¹⁰。

それらとは筆跡も形状も異なるが、源氏物語絵巻の詞書断簡と思われるものが現れた（個人蔵）。料紙は楮紙、細かい雲母が一面に撒かれている。薄墨で天地にそれぞれ一条の界線が引かれている。特徴的なのは、縦の寸法の大きさであり、三四・二センチもある（横寸は一四・九センチ＋一・〇センチ＝二五・九センチ）。特大な料紙として知られる伝為家筆河内本断簡でも、縦の寸法は三二・五センチ程である。この料紙の大きさに加え、行間を広くとったゆ

つたりした書きぶり、大きな字粒からみて、この断簡は絵巻の詞書と考えられる。はなやかな装飾料紙ではないが、先述の天理図書館蔵とメトロポリタン美術館蔵の詞書料紙は素紙であるので、新出断簡が絵巻の詞書であつてもおかしくない。

新出断簡は二葉に別れているが、一葉目の右端と二葉目の左端に対称となる複雑な虫喰い痕がある。おそらくこの二葉は背中合わせにされて保管されていた時期があり、その折に虫喰いが生じたようである。しかし、この二葉は、本来、連続した一続きの卷子本の料紙であつたと判断される。なぜなら、本文が連続しており、二葉をつなげると紙面に走る巻皺が連続するからである。それゆえ、二葉を連続させた形で翻刻と画像を示しておく。なお、傍線部分は青表紙本系大島本と異なる部分である。

- ① いと、しくすきにし方の恋しきにうらやましくも
 - ② かへるなみなさらぬたに心つくしの秋なるに海
 - ③ はいととをければゆきひらの中納言せき
 - ④ ふきこゆるとひけむうらなみいとちかあふき
 - ⑤ こえて又なくあはれなるものはかゝる所の
-
- ⑥ あきなりけり御まへに人うちやすみわたり
 - ⑦ ぬ た、ひとりめをさましてまくらをそはた
 - ⑧ て、よものあらしをき、給へは浪こゝもとにたち
 - ⑨ くるこゝちしてなみたおつともおほえぬに

これは源氏物語中屈指の名文とされる、須磨巻の一節である。比較のために青表紙本系大島本を忠実に再現してい

る岩波文庫本『源氏物語（二）』の本文を示してみる。傍線部分は断簡と異なる部分である。

須磨にはいとゞ心づくしの秋風に、海はすこしとほけれど、行平の中納言の、「関吹き越ゆる」と言ひけん浦波、よるくはげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものは、かゝる所の秋なりけり。御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、ひとり目をさまして枕をそば立てて四方の嵐を聞き給ふに、波たゞこゝもとに立ちくる心ちして、涙落つともおぼえぬに

断簡の本文と大島本の本文とは、著しく相違している。事もあろうに、名文の冒頭が大きく異なっている。大島本をはじめとする源氏物語の本文は、「須磨にはいとゞ心づくしの秋風に」であるが、断簡は「いと、しくすきにし方」と続いている。叙情的名文を、さらに情感をこめて和歌にしてみました。興味深い現象だ。

ちなみにこの歌は、伊勢物語七段・後撰和歌集・時代不同歌合（穂久邇文庫蔵飛鳥井雅康筆本などの初撰本のみに二七番左業平として載る）にみえる歌である。伊勢物語七段は東下りの中の一段で、歌は「伊勢おはりのあはひの海づら」で詠まれた歌。「いとゞしく過ぎゆくかたの恋しきにうらやましくもかへる浪かな」（岩波書店 新日本古典文学大系本による 一部漢字表記を仮名に改めた）。また、後撰和歌集も「いとゞしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくもかへる浪かな」（岩波書店 新日本古典文学大系本による 一部漢字表記を仮名に改めた）。また、後撰和歌集も「いとゞしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくもかへる浪かな」（岩波書店 新日本古典文学大系本による 一部漢字表記を仮名に改めた）であり、伊勢物語と同じ本文である。これに対して時代不同歌合では、「いとど敷くすぎにしかたの恋しきにうらやましくもかへる浪かな」（新編国歌大観 時代不同歌合 解説による）である。断簡の本文は、伊勢物語・後撰和歌集とは異なり、時代不同歌合初撰本と同じである。時代不同歌合は隠岐配流中の後鳥羽院によって編まれ、初撰本は天福二年（一二三四）から文暦二年（一二三五）春頃までに成立したとされる¹⁾。もし、断簡の本文が時代不同歌合初撰本の本文によっているならば、本断簡の書写年代の目安として、天福二年（一二三四）以降と考えられる。仮名の書体からみても鎌倉後

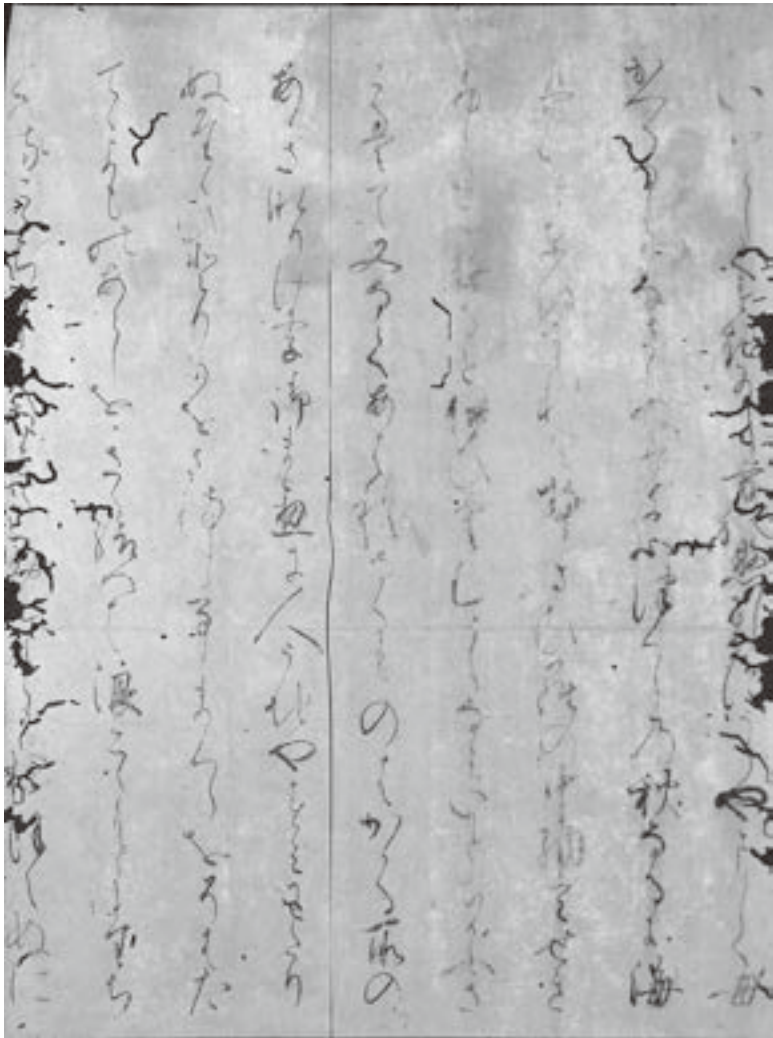


図3 源氏物語絵巻詞書A

期はあろうと思われる。

冒頭以外の本文異同を源氏物語大成によって示すと、次の通りである。

- ①断簡三行目「いととをければ」は、青表紙本・河内本・別本いずれにもみられない、独自異文。他はすべて「すこしとほけれど」。
 - ②断簡三行目「ゆきひらの中納言」は、青表紙本系の横山本、河内本系の大島本と一致するが、他のほとんどの写本は「ゆきひらの中納言」。
 - ③すべての写本が「よるくはげに」を有するが、断簡四行目にはそれが無い。断簡の独自異文。
 - ④断簡四行目「ちかふ（う）」とあるのが正しい」とウ音便化しているが、青表紙本系の肖柏本のみが同じで、他本はすべて「ちかく」。
 - ⑤断簡六〇七行目「人うちやすみわたりぬ」は、独自異文。青表紙本系は「いと人すくなにてうちやすみわたれるに」、河内本系は「いと人すくなにてみなうちやすみわたれるに」。別本にも断簡と同じ本文は無い。
 - ⑥断簡七行目「たゝひとり」は、他のすべての写本は「ひとり」。断簡の独自異文。
 - ⑦断簡八行目「給へは」は、他本はすべて「給ふに」。断簡の独自異文。
 - ⑧断簡八行目「こゝもとに」は、他本はすべて「たゝこゝもとに」。断簡の独自異文。
- こうしてみると、この断簡の本文は青表紙本とも河内本とも大きく異なる。では、別本とすべきかといえば、別本の中にも近い本文は無い。散文を一首の和歌に改編したり、語句を省略したり追加したりするのは、絵巻の詞書の特徴である。この断簡の独自の本文も、絵巻の詞書だからと判断すべきであろう。文学テキストとしての本文では無く、絵巻の詞書として改編を加えられた本文と認識すべきであろう。ちなみに、この断簡のような他本と著しい本文異同を有する六半本（小型の冊子本）の断簡が紹介され、六半本ゆえに絵巻の詞書では無く、注目すべき特殊な本文とされた¹²⁾。それに対して、絵巻の詞書が冊子本として写本されたのだという見方もある¹³⁾。特殊な別本本文とするより、そういう可能性を考える方が合理的であろう。ただし、この六半本は源氏物語梗概本の断簡の可能性もあるので

はないかと思量する。

ともあれ、従来知られていなかった鎌倉期の源氏物語絵巻の存在を、この詞書の断簡は教えてくれる。ツレの出現を期待したい。

四 伝浄弁筆 源氏积

源氏物語の注釈史は『源氏积』にはじまる。『弘安源氏論議』の「跋」に、

此物語ひろくひろき年のほどよりいできにけり。しかれども世にもてなすことはすべらぎのかしこき御代にはや
すくやはらげる時よりひろまりくだれる。たゝ人のなかにしては、宮内少輔が积よりぞあらはれける。

(『源氏物語大成研究資料篇』所収本による)

とあり、「宮内少輔が积」すなわち藤原伊行の『源氏积』が濫觴であると認められている。この『源氏积』は幻の書であったが、昭和初年以降いくつかの写本・断簡が発見された。前田家本、明石巻までの残欠本である書陵部本（近年これの親本にして完本である冷泉家本——冷泉家時雨亭叢書第四十二卷所収——が公表された）、抄出本である書陵部蔵『源氏物語注釈』所収「源氏或抄物」、北野本『末摘花・紅葉賀断簡』、都立中央図書館蔵「伊行源氏积」、建仁寺切他の古筆切などであるが、これら資料によって注釈史・享受史に新しい視点もたらされた。『源氏积』は源氏物語の原文を要約引用しつつ、その部分に関する注を付けているが、その源氏本文の要約や引用のしかた、あるいは注の条目の有無、注の内容において、それぞれ違いがある。この違いが生じた原因は、『积』の原初の体裁が注を直接伊行所持の源氏物語本文中に書き込んだものであったのを、後人が適宜抄出したため、と考えられていた¹⁴。しかし、諸資料の比較検討から、それは伊行自身による注の増減・改訂・精選の痕跡と考えられるようになった¹⁵。そしてさら

に、源氏物語の原文を要約引用しつつ引歌や故事を注するという『源氏釈』の初期の形態は、注によって読解のための知識を与えると同時に、要約本文によって物語そのものを読むことのできる機能をも担っていたことが、明らかにされた⁽¹⁶⁾。中世源氏物語享受史は、細密化した注釈書と梗概書という二つの流れを形成するが、『源氏釈』をはじめからその二つの性格を内包していたということになる。最初の源氏物語注釈書『源氏釈』は、注釈であると同時に梗概書でもあったのである。

また、北野本は前田家本・冷泉家本・書陵部蔵「源氏或抄物」に比べて、引用する物語本文の量が多く、梗概を記すことに重きがおかれているという⁽¹⁷⁾。そして、「源氏或抄物」は北野本のような梗概書の要素の強いものから、注記の部分を抜き出して注釈書としてまとめられたものであり、北野本は『源氏釈』第一次本とされるもの（冷泉家本・書陵部蔵残欠本）よりも前の、『源氏釈』の最も原初的な形態だという⁽¹⁸⁾。

つまり、伊行は最初、自分の所持する源氏物語の本文中に、引歌・引詩などの注記を書き入れた。次の段階で、源氏物語の梗概書を作りその中に注記を織り込んでいった（北野本）。次に、注の部分を独立させ、注釈書の性格を強くしたのが、冷泉家本などの一次本、それをさらに精選したのが前田家本の二次本なのである。

そしてまた、梗概書の性格ないし源氏物語和歌集の性格を強めていったものに、広島大学蔵「逸名・源氏物語」があるという⁽¹⁹⁾。

以上のように、源氏物語の注釈書・梗概書・源氏和歌集などは、それぞれ別個に発生し展開していったのではなく、もともとは一つの根から出たものであり、源氏物語享受史という一大文化を有機的に形成していることが判ってきたのである。

鎌倉末から南北朝時代にかけての歌人、二条為世の和歌四天王のひとり、浄弁を伝称筆者とする源氏釈の古筆切が紹介さ⁽²⁰⁾れ（松風巻）、一次本二類系統と位置づけられている⁽²¹⁾。そのツレが現れた（架蔵）。料紙は楮紙。縦二四・五センチ、横一四・三センチ。一面八行書き。浄照坊蔵の断簡と比するに、表面の右端の一行（裏面の左端の一行）

が切断されているようである。末摘花巻である。極札は付属しない。

表

たすきはくるし^とまの給ところ
思はずはとやはいひはてぬ

などよの中のためたすきなる

又そのみやにふみをたにといとおしくおほしいて、
いふかたそありけるあめふりいて、ところせくも
あるにかさやとりせむとはたおほされすやといふ所

^{イモカト}
妹門 呂

伊毛可^於度、世奈可^於止^リ田支須支可^於祢天也^安、

裏

和可由可^於波此^ツ知可^於左乃^於此知可^於左乃^リ安女毛^於
也不良奈无^リ之天多乎^左安万也止利^ツ可^左也

止^リ也止利^ツ天末加良无^リ之天多乎^左止^リ

すえつむふるきのかはきぬをき給へりといふ事

ふるきといふは貂といふけたもの、かはのきぬなり

たちはなの木のうつもれたる隨身めしてはら

はせ給うらやみかほにまつの葉のおれおきあか

りてこほれたるをとみなみこす、への

なお、ツレの二行の断簡のコピーを、仁平道明氏より示されたことがある。

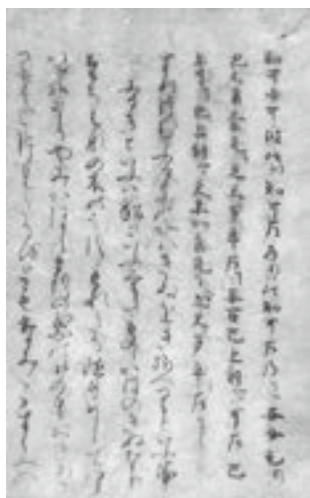


図5 伝浄弁筆源氏积切裏

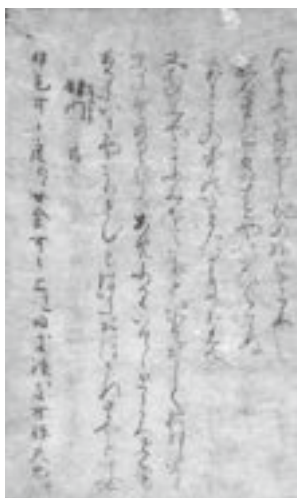


図4 伝浄弁筆源氏积切表

奈天也和礼乎波波名天也女左之多久

こてふ

とあり、初音卷の末部と胡蝶卷の卷名が記されている。縦二四・九センチ、横三・一センチ。面白いのは極札に「加茂甲斐敦直」とあることである。江戸初期の書家、藤木敦直のことで、敦直は後水尾天皇より書博士の称を賜り、門人に上代様書道の名手荒木素白がいる。しかし、字形からして、これも伝浄弁筆断簡のツレと認められる。

五 伝四辻善成筆 河海抄（細川切）

河海抄は、室町將軍足利義詮の命をうけて四辻善成が編んだ、古来の諸注を集成したもの。細川切は、その著者善成自筆の断簡と伝称されてきた。『古筆名葉集』には「河海抄切 四半昏杉原カナ交リ此外ルイナシ」とあり、『増補新撰古筆名葉集』には「細川切 四半河海抄カナ交リ杉原昏虫喰アリ」とある。細川切は、『古筆学大成21』²²⁾には一七葉が収載されており、また、小林強「源氏物語関係古筆資料集成稿」²³⁾には、『古筆学大成』の分を含め二七点が挙げられている。細川切はすべて桐壺卷の断簡であるが、他に序と料簡の存在も報告されている。すなわち、前田家尊経閣文庫蔵の「河海抄序」（四辻善成筆と極められた卷子一軸）が細川切であり、全二紙の内、第一紙が序の前半、第二紙から第八紙までが料簡、第九紙と第一〇紙が桐壺卷、第一一紙が料簡の終わり近くであるという²⁴⁾。稿者も「序」の一部を紹介したことがある²⁵⁾。なお、原態は袋綴本と推定され、本文には誤写・誤脱があり善成自筆本とはいえ、室町時代前半まで下るといふ²⁶⁾。

新たに出現した断簡は、料紙は楮紙、虫損が甚だしい、縦二五・一センチ、横二〇・五センチ、一一行にわたり桐壺卷の注が記されている。

あさほらけ萩の上葉の露みれは

や、はたさむし秋のはつかせ 拾遺

ゆけいの命婦をつかはす

大同三年七月廿日以衛門府併衛士府又以韃負

名号同左右韃負府者

衛門府 ユケヒ
ミカヒモリ 見識員令

職員令云内外命婦注曰謂婦人帶五位以上為内

命婦五位以上妻曰外命婦也又後宮識員令曰其他

命婦准夫位次故周礼曰内命婦謂九嬪世婦

女御也外命婦謂卿大夫之妻也

ゆけいの命婦ハ左右衛門佐也命婦ハ五位女

天理図書館蔵文祿五年書写本と異同は無い。

注

- (1) 藤井隆「王朝物語の古筆切―その地位と書写様式を中心に―」(久下裕利・久保木秀夫編『平安文学の新研究物語絵と古筆切を考える』新典社、二〇〇六年)。
- (2) 中田剛直「竹取物語の研究 校異篇解説篇」(塙書房、一九六五年)。
- (3) 片桐洋一「竹取物語 解説」(日本古典文学全集『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』小学館、一九七七年)。
- (4) 久曾神昇「竹取物語の古鈔本断簡」(『仮名古筆の内容的研究』ひたく書房、一九八〇年)。
- (5) 田中登「物語古筆切覚書」(久下裕利・久保木秀夫編『平安文学の新研究 物語絵と古筆切を考える』新典社、二〇〇六年)。
- (6) 王朝物語史研究会編(勉誠出版、二〇〇八年)。

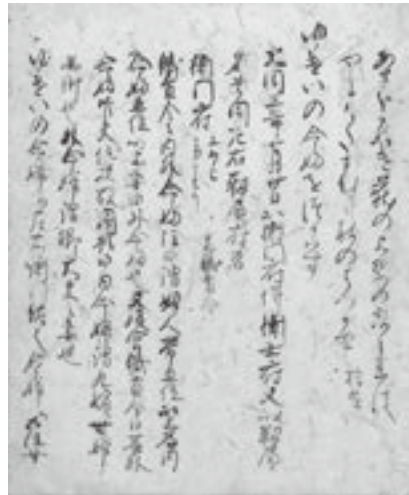


図6 伝四辻善成筆河海抄細川切

- (7) 注(3)に同じ。
- (8) 加藤洋介「了俊・兼良の源氏物語―書陵部蔵源氏物語をめぐって―」(愛知県立大学 説林)一九九九年三月)。
- (9) 新見哲彦「今川了俊筆『源氏物語』伊予切集成―新出断簡の紹介と傍記の性格」(久下裕利・久保木秀夫編『平安文学の新研究 物語絵と古筆切を考える』新典社、二〇〇六年)。
- (10) 田中登『平成新修古筆資料集第三集』(思文閣出版、二〇〇六年一月)、田中登『平成新修古筆資料集第五集』(思文閣出版、二〇一〇年九月)。
- (11) 樋口芳麻呂「時代不同歌合考」(『国語と国文学』一九五五年八月)。
- (12) 藤井隆「源氏・狭衣物語古筆切について」(久曾神昇博士還暦記念研究資料集『風間書房、一九七三年)。
- (13) 久下裕利「あとがき―国宝源氏絵巻と古筆切」(久下裕利・久保木秀夫編『平安文学の新研究 物語絵と古筆切を考える』新典社、二〇〇六年)。
- (14) 池田亀鑑「中古国文学叢考・源氏物語に関する論考」(目黒書店、一九四七年)。
- (15) 伊井春樹「源氏釈の形態」(『源氏物語と和歌 研究と資料』武蔵野書院、一九七四年)。
- (16) 注(15)に同じ。
- (17) 稲賀敬二「源氏物語初期古注釈の問題」(『古筆学叢林 第三卷』八木書店、一九九一年)。
- (18) 田坂憲二「北野克氏蔵『末摘花・紅葉賀断簡』について―『源氏釈』原型本の推定―」(『九州大学文学部文学研究』七九輯 一九八二年)。
- (19) 注(17)に同じ。
- (20) 伊井春樹「古筆切集―浄照坊蔵」(大阪大学古代中世文学資料研究叢書一 和泉書院、一九八八年)。
- (21) 田坂憲二「源氏釈」の古筆資料について」(『香椎潟』四三号 一九九八年)。
- (22) 小松茂美、講談社、一九九三年。
- (23) 伊井春樹編『本文研究 第六集』(和泉書院、二〇〇四年)。
- (24) 高田信敬「『河海抄抄出』小引(付) 細川切のこと」(『源氏物語と歌物語 研究と資料』武蔵野書院、一九八四年)。
- (25) 池田「国文学古筆切資料 源氏物語注釈書・梗概書の古筆切」(『中央大学文学部紀要九三号』二〇〇四年三月)。
- (26) 注(24)に同じ。